

Another Country における性愛の限界と可能性

吉岡 求

はじめに

ジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) は、1962年11月に *The New Yorker* に掲載されたエッセイ “Letter from a Region in My Mind”¹ の中で、愛についてなにやら恐ろしげなことを述べている。「我々がそれなしでは生きていけないと恐れ、またそれとともに生きていけないことを知っている仮面を、愛は剥ぎ取るのだ (“Love takes off the masks that we fear we cannot live without and know we cannot live within”)」 (“Down” 341)。このエッセイで一貫して問題となっているのは、黒人・白人間の人種的な緊張関係であり、引用箇所において「仮面」という言葉で暗示されているのも、黒人・白人を問わずアメリカ国民全体に内面化された人種への自意識であると考えてよいだろう。人種的差異は、アメリカ国民の意識の隅々にまで浸透しており、人々はその差異を差異として維持することなくしては、生きることさえままならないと恐れている。しかしまさにその差異に基づく緊張関係こそが、いまアメリカを、とりわけ黒人たちを危機に追いやるものに他ならず、ゆえに、我々はこれまでの（人種的差異に基づいた）自身のあり方を破壊することを覚悟してでも、この人種という「仮面」を剥ぎ取らなければならない。それを可能にするものこそが愛なのだ。ボールドウィンにとっての愛とは、己のアイデンティティを危機に晒しつつ、それでもなお（人種的な）他者との共存を目指して行われる、投機的な実践であった。

彼が同年に出版した長編小説 *Another Country* は、まさにこの「人種と愛」の葛藤を物語の中核に据えたものである。物語は黒人ジャズ・ドラマーのルーファス・スコットと南部出身の白人女性レオナの性愛関係の挫折、またその結果としてのルーファスの自殺にはじまり、彼の妹アイダと彼の親友で白人のヴィヴァルド・ムーアとの恋愛関係を中心に展開していくが、このとき、ルーファスの死が示す異人種間の性愛の困難に向き合うことが、白人であるヴィヴァルドの、そして我々読者への課題として設定されることになる。

こうしたあらすじからもわかるように、*Another Country* において中心的に描かれる愛は常に「性愛」の形をとる。すでに挙げたものの他、この作品ではエリックとイーヴという白人同性愛カップルや、リチャードとキャスの白人夫婦、さらにキャスとエリックの「不倫」、ヴィヴァルドとエリックのセックスなど、互いに絡み合う様々な性愛関

係が描かれる。そればかりか、エリックを介してルーファスとヴィヴァルドの友人関係にも遡及的に性愛の可能性が見出されるなど、ほとんどすべての関係性が性愛（あるいはその欠乏）へと収斂していくのである。Fred L. Standleyの言葉を借りるなら、この小説においては「(相手が誰であろうと)性交渉による表現を通じてのみ、人は孤独と疎外から救われ、思いやりと優しさという愛の本質によって、他者の本質を理解できる」(508-9)のである。

ではなぜ「性愛」なのだろうか。それはおそらく「愛による人種的差異の克服」という課題において、その達成を可能にすると最も期待されるのが性愛であり、その困難を最も前景化するものもまた性愛であるからだろう。我々はまず、*Another Country*における性愛と人種的差異の関係を分析することからはじめなければならない。そしてそのことから発見されるのは、人種的差異が性愛の成就を阻害するだけではなく、性愛というものに登場人物たちが抱く過剰な期待そのものが彼らを苦しめる、という事実であるように思われる。

さて、性愛と人種という観点から作品を読み進めたときに問題となるのは、作品終盤における二つの性愛関係、すなわちヴィヴァルドとアイダの異人種間の異性愛関係と、ヴィヴァルドとエリックの白人同性愛関係の奇妙な交錯だろう。というのも、プロットを中心であり、またヴィヴァルドが解決しなければならない問題は、「ルーファスの死」によって前景化された異人種間の性愛の困難であるにもかかわらず、実際にヴィヴァルドにある種の救いをもたらすのはエリックとの同性愛関係であるからだ。この結末に対する批評家の反応は様々で、たとえばJohn S. Lashは、彼らの同性愛関係が現実の人種問題に対してなんの効力も持ち得ないと批判する(53)。一方でBrandon Gordonは、ヴィヴァルドはエリックとのセックスを通して“passivity”を獲得し、アイダの苦しみを理解することができるようになっていくと述べ、同性愛関係の肯定的な効果を主張する(88)。しかし同性愛がこのような「効果」として用いられてしまい、「ヘテロノーマティヴなものへの回帰」を助長することを問題視するMatt Brimのような批判者も存在する(116-17)。

こうした批評の問題点は、作品の結末を評価するにせよ批判するにせよ、ここに描かれる二つの性愛のどちらか一方を本質化し、二つの関係が共存する可能性を無視していることである。本稿の主張は、ヴィヴァルドとエリック、ヴィヴァルドとアイダの関係は、それぞれが独立して存在するのでも、またどちらかがどちらかに奉仕するのでもなく、互いに補完的なものとして描かれているというものであり、その共存こそが、性愛にかけられた過度のプレッシャーから登場人物たちを解き放ち、性愛の新たな可能性を提示するように思われる。

以下、第1節では*Another Country*において登場人物たちが期待する性愛の理想と、それが達成されるメカニズムを概観する。続いて第2節では、ルーファスとレオナの間を例に、人種的差異が性愛の成就を阻害する過程を分析する。第3節では、アイダ、ヴィヴァルド、エリスの三角関係を分析することで、単一性を前提とする性倫理(モノ

アモリー) がアイダの苦悩の原因であることを述べる。第4節では、二つの性愛関係の共存が、性愛の困難に対する解決策となる可能性を検討する。

1、性愛の理想

Another Country という小説において、人々が「愛」に求めるものとはなにか。たとえば作品序盤、若手の黒人ジャズミュージシャンのサクスの音色は、ルーファスの胸に“Do you love me?”という懇願にも似た問いかけとして響く(8)。サクスの音色は、「お前は俺を愛しているのか？ 愛してくれるのか？」という疑問形において若きサクス奏者の、そして彼に感応するルーファス自身の、愛への渴望を伝えている。この場面が、いま自ら死を迎えようとするルーファスによって回想されるのは象徴的であり、愛の欠乏による孤独が、人の実存を決定的に損ない得ることが示唆される。翻って愛を定義するなら、それは他者による自己の絶対的な承認であり、それ無しでは自分自身を保つことさえままならない、人間としての実存の基盤である。

語の広い意味において、愛は多種多様な人間関係で構築され得る。我々は日常的に家族愛や友愛など様々な愛に触れながら生きているわけだが、すでに指摘したように、*Another Country* において個人の実存に作用する愛は、ただ性愛のみである。たとえばキャスは、小説家として成功した夫と二人の子どもを持ち、家族愛を存分に享受しながら、なお性愛の欠如によって孤独を免れない。結果、キャスを一時的にであれ救うのは、子どもたちとの愛情でもヴィヴァルドとの友情でもなく、エリックとの情事である。性愛に大きなストレスが置かれていることは、他ならぬルーファスの自殺が、レオナとの関係の挫折を直接の原因としていることから明らかだろう。たとえば家族や友人たちとの関係においては、客観的に見てルーファスは必ずしも孤独ではない²。彼には誰よりも自分を慕う妹もいれば、彼が侮辱されたことに怒り体を張って戦うような友人もいる。それでもなお性愛関係の破綻のために、彼は救われることがないのだ。

注意せねばならないのは、*Another Country* において性愛は、人を孤独から救い得る唯一の手段でありながら、同時に、まさにそれが「性」と「愛」の融合として期待されるがゆえに、常に内部分裂の危機を抱えている、ということである。たとえばヴィヴァルドは、レオナとの関係の破綻が決定的になり、自暴自棄になったルーファスと共に過ごした夜を思い出しながら、エリックに不思議な告白をする。

Well, when he looked at me, just before he closed his eyes and turned on his side away from me, all curled up, I had the weirdest feeling that he wanted me to take him in my arms. And not for sex, though maybe sex would have happened. I had the feeling that he wanted someone to hold him, to hold him, and that, that night, it had to be a man. I got in the bed and I thought about it and I watched his back, it was as dark

in that room, then, as it is in this room, now, and I lay on my back and I didn't touch him and I didn't sleep. I remember that night as a kind of vigil. I don't know whether he slept or not, I kept trying to tell from his breathing—but I couldn't tell, it was too choppy, maybe he was having nightmares. I loved Rufus, I loved him, I didn't want him to die. But when he was dead, I thought about it, thought about it—isn't it funny? I didn't know I'd thought about it as much as I have—and I wondered, I guess I still wonder, what would have happened if I'd taken him in my arms, if I'd held him, if I hadn't been—afraid. I was afraid that he wouldn't understand that it was—only love. Only love. But, oh, Lord, when he died, I thought that maybe I could have saved him if I'd just reached out that quarter of an inch between us on that bed, and held him. (342-43)

ここでのヴィヴァルドの発言は非常にアンビバレントなもので、それはそのまま性愛というものが内包するジレンマを表してもいる。まずヴィヴァルドは、性的な関係に発展する可能性を孕んだ（“though maybe sex would have happened”）身体的接触が伝える愛（だけ）が、ルーファスを自死から救い得たかもしれないと考える。この推測は、本来はルーファスとの間に行われるべきだった肉体的接触が、告白を聞いたエリックとの間で再演され、それが実際に挿入を伴う性交渉に発展し、結果としてヴィヴァルドに救いをもたらす、というプロット上の帰結によって、ひとまず説得力を与えられている。しかしそれと同時に、ここでヴィヴァルドが、セックスと愛を区別し、後者の重要性だけを繰り返し強調していることに注目しよう。ルーファスを抱きしめるのは「セックスのためではなく（“not for sex”）」、それは「ただ愛（“only love”）」を伝えるためなのだ。彼がこの二つを区別するのは、「それがただの愛だということがルーファスに伝わらないかもしれない（“I was afraid that he wouldn't understand that it was—only love”）」、すなわち、愛が性的欲望として（のみ）解釈されることを恐れたからに他ならない。

ここで示される性愛をめぐるジレンマとは、愛は性的接触においてはじめてその最大の効果を発揮する（と信じられている）が、性的なコミュニケーションは常に（愛を伴わない）性的欲望の結果として解釈される可能性があり、結果として愛の伝達を阻害する、ということである。このジレンマがとりわけ重要なのは、おそらくこの小説における最大の問題、すなわち「愛は人種的差異を克服できるか」というテーマにおいて、「愛」が持ち得る可能性と不可能性が端的に表れているからだ。

あらためて問わねばならないのは、性愛の成立がどのように条件づけられているかということである。すでに触れてきたように、性愛の核となる部分には親密な身体的接触がある。しかし身体的接触と愛が同時発生的であるわけではなく、身体的接触以前にもそれを期待する欲望の段階が存在する。*Another Country* というテキストは、主要登場

人物たちの性愛関係を、欲望の発生から身体的接触（性交渉）、そしてそれが愛として認識される（あるいは認識に失敗する）まで詳細に描いているが、それはこうした性愛の認知過程にこそ、「愛」の可能性と困難が示されているからである。ここで、登場人物たちの性愛の描写を追いながら、その過程を分析していきたい。

まず注目したいのは、物語の出発点として存在するルーファスとレオナの関係の成立過程である。黒人バンドによるジャズが流れるハーレムの酒場でレオナに出会ったルーファスが最初に示す反応は、彼女の肉体的特徴に対するものであった。

She was from the South. And something leaped in Rufus as he stared at her damp, colourless face, the face of the Southern poor white, and her straight, pale hair. She was considerably older than he, over thirty probably, and her body was too thin. Just the same, it abruptly became the most exciting body he had gazed on in a long time. . . . And he took her arm, deliberately allowing the back of his hand to touch one of her breasts. . . . She didn't seem at all the type to be interested in jazz, still less did she seem to be in the habit of going to strange bars alone. She carried a light spring coat, her long hair was simply brushed back and held with some pins, she wore very little lipstick and no other make-up at all. (9-10)

ルーファスの視線はレオナの顔から頭髪、身体へと移り、その視覚的刺激は彼に性的欲望を催させ、手の甲に伝わる乳房の感覚は否応無しにその興奮を加速させる。また、後の性交渉においてルーファスの嗜虐心をくすぐることになる、レオナが「南部出身の貧乏白人」であるという認識にも注意しておこう。このときルーファスは、総体としてのレオナの人格にはなんの興味もなく、その性的欲望は、顔や髪や乳房といった身体の部分、あるいは「南部出身の貧乏白人」であるという属性に対して向けられている。この直後、レオナの不幸な身の上を聞いたルーファスは「想像力を刺激され、レオナも一人の人間である」と認識するのだが、直後、「俺は一晩彼女が欲しいだけなのだから」と、「その認識を振り払」う（13-14）。

レオナの人格に向けられたこの意識は、彼がレオナを性的欲望の対象、つまりはモノとして扱うことを禁じるが（“Again something warned him to stop, to leave this poor little girl alone”[18]）、同時に彼女に対するある種の「愛情（affection）」をも感じさせることになる（“and at the same time the fact that he thought of her as a poor little girl caused him to smile with real affection” [18]）。重要なのは、この“affection”³あるいは“tenderness”が、性的欲望を伴う肉体的接触と、対象の人格に対する配慮を架橋する可能性が示されている点である。ルーファスがこの“affection/tenderness”を保ったまま、シームレスにレオナとの性行為へと移行していくシーンは

象徴的だ。

Yes, he was high; everything he did he watched himself doing, and he began to feel a tenderness for Leona which he had not expected to feel. He tried, with himself, to make amends for what he was doing—for what he was doing to her. (21)

ここには彼女を性的欲望の対象として扱おうとする (“what he was doing to her”) ルーフアスと、自身の行為をもってそれを償わんとするルーフアス (“He tried, with himself, to make amends”) の奇妙な分裂と、統合への試みが見出される。

ここに、性愛におけるダイナミズムの核心がある。すなわち、対象の人格の総体に向けられる愛と、対象の部分に向けられる性的欲望という、まったく異なる心の働きであるように思えるものが、“affection”を伴う身体的接触を通じて一致していくこと。互いの性的欲望が、それぞれ部分的な性質に向けられているのではなく、総体としての対象に向けられており、その対象が取替不可能であると直観すること。この一見不可能な結びつきを互いの内面において確信することが「性愛」と呼ばれるものの成就であり、それこそが *Another Country* の物語において人々が求め続けていることであるように思われる。

たとえば大澤真幸は、愛という概念を、固有名に関するクリプキの議論に結びつけて論じており、「名前が性質の記述に還元しえない」ように「愛の理由が相手の性質に還元しえない」(21)と述べている。大澤による愛と固有名のアナロジーは、対象の属性を捨象するという性質において、先に触れたボードウィンによる愛の定義にも通じ、*Another Country* の登場人物たちが求め続ける愛の形を端的に表現しているといえるだろう。つまり、人が他者を愛する理由を列挙することをやめ、たとえばその名を呼ぶことでしか表現することができない愛を獲得するとき、主体と対象との関係はそれぞれの属性を超越して結ばれることが期待される。これを小説における「人種と愛」の文脈において具体化するなら、愛するものは、己のアイデンティティを対象との愛の関係のみにおいて確立させることが可能になると期待されるため、それは「人種」という属性を超越して人間関係を成立させ得る。ヴィヴァルドとアイダ、エリックとイーヴ、ヴィヴァルドとエリックの性行為が、互いの名を呼び合うことに収斂していくのは(178、226、386)、性的な陶酔のうちに溶解しながら、睦み合う相手だけを頼りとして(相手との融合のうちに)止まろうとする互いの自我を象徴的に表しているとも考えることができるだろう⁴。いい換えれば、性質や帰属先を無効化させる愛の理想は、属性や性質を離れ普遍化された自我の観念を生み出すのである。

2、人種的差異と性的欲望

ここまでで確認されたように、*Another Country* において登場人物たちが求めたのは、身体的な接触を介しながら、総体としての互いの実存を承認し合うような性愛の理想的な形であった。しかし小説のプロットが示すのは、むしろこうした性愛の理想の挫折である。それは端的には、レオナとの性愛関係がルーファスを救うどころか、自殺の直接の原因になるという事態が指し示しているし、また、小説中成立する様々なカップルが、なんらかの形で性愛の理想から逸脱する、あるいは破綻する可能性が示されることにも表れている。逆にいえば、登場人物のほとんど誰一人として性愛関係と、それが引き起こす苦境から逃れられないということ自体、理想的な性愛関係に過剰に重きを置く自我のあり方が批判的に描かれていると考えることもできるだろう。本節では、ルーファスとレオナの関係が抱えた矛盾を探ることを通じ、ポールドウィンが性愛をいかに相対化しているかを確認する。

永尾悟は、ルーファスの自殺の理由は必ずしも明確ではなく、「ジャズ・ドラマーとして華々しく活躍していた彼が自己破滅へと至る切迫した状況は描かれるものの、自ら死を選んだ経緯については断片的な回想を除いて決定的な出来事や要因は示されていない」と指摘する(208)。また Kevin Ohi によれば、彼の死は、「明かされることも解かれることもないトラウマの原因」、あるいは「謎」である(278)。しかし、ルーファスの苦しみ(自殺の理由)を理解しないことがヴィヴァルドら白人たちの最大の罪であることが、アイダによって繰り返し糾弾されている以上、*Another Country* というテキストは、ルーファスの死を謎のままにすることを厳しく禁じているといえるだろう。ヴィヴァルドとともに、ルーファスの死を正しく理解することが、作品を通じて読者に求められているのである。

ルーファスの死が、直接にはレオナとの関係の破綻に起因していることは、作品冒頭からルーファスの自殺までに記述されるエピソードが、彼らの性愛関係のはじまりから破綻までに関わっていることから、ひとまず明らかとあってよいだろう。さらに、その破綻の原因がもっぱら二人の人種的差異に基づいていることも、ルーファス自身やアイダの訴えから推測できる。ここで問うべきは、性愛と人種的差異がどのようなメカニズムにおいて関係しているのか、より具体的には、人種的差異はいかにして性愛の成立を阻害するのか、である。

自身で認めているように、そもそもルーファスは妹に比べ人種意識が希薄な人間である。ルーファスはヴィヴァルドやキャス、エリックといった白人の友人たちとも日常的に交際しており、常に自身の「黒さ」を呪い白人を恨むようなタイプではないのだが、レオナとの恋愛関係を通じて彼は徐々に自身の「黒さ」への意識を強くしていく。すなわちルーファスは、「レオナが白人であり、自分が黒人であるからこそ、レオナは自分を愛し、自分はレオナを愛しているのではないか」という疑念に取り憑かれていくことになる。

She [Ida] would say, You'd never even have looked at that girl [Leona], Rufus, if she'd been black. But you'll pick up any white trash just because she's white. . . . Then, for the first time in his life, he wondered about that—or, rather, the question bumped against his mind for an instant and then speedily, apologetically, withdrew. (28)

この疑念はレオナとの付き合いが親密化するほどにルーファスの中で大きくなり、ついには確信に至ることになる。重要なのは、人種的自意識がルーファスの中で肥大するとき、身体的接触を介した性的欲望と愛の統合、すなわち性愛の成就が困難になるということである。

“She [Leona] loves the colored folks so *much*,” said Rufus, “sometimes I just can’t stand it. You know all that chick knows about me? The *only* thing she knows?” He put his hand on his sex, brutally, as though he would tear it out, and seemed pleased to see Vivaldo wince. He sat down on the bed again. “That’s all.” (68)

「レオナが俺について知っているのはこれだけだ」と自らの性器を掴んでみせるときルーファスは、レオナが自分に向ける“love”が、結局のところ性的欲望に過ぎないのだ、という意識に苦しんでいる。結論を先取りすれば、自らを白人の性的欲望の対象としてしか認識できない自意識こそが、ルーファスの性愛の成就を阻害し、自ら死を選んでしまうほどの徹底した孤独を彼に強いるのである。

人種的差異は、なぜルーファスを性的欲望の対象にとどめてしまうのか。たとえばボールドウィンと同時代の思想家 Franz Fanon は、黒人男性に対する性的なステレオタイプの言説が、男女を問わず白人たちに広く共有されている状況を指摘している。とりわけ以下に見る白人女性から黒人男性に対する性的欲望の言説は、ルーファスがレオナの内に見出した欲望のあり方とぴったり一致する。

All the negrophobic women we met had abnormal sexual lives. Their husbands had left them; they were widows and did not dare replace the deceased; or they were divorced and reluctant to invest in a new relationship. All of them bestowed on the black man powers that others such as husbands or occasional lovers did not possess. And then there occurs an element of perversity, a surviving element of infantile structure: God only knows how they must make love! It must be terrifying. (Fanon 136)

Fannon の分析によれば、“hallucinating sexual power”を持った“beast”という黒人男性へのステレオタイプのイメージは、とりわけ性的に抑圧され、欲求不満な白人女性たち（“abnormal sexual lives”を送る白人女性たち）の抱きがちな観念である。Fannon による詳細な調査は、こうした黒人男性に対するステレオタイプが現実中存在し、彼らを苦しめていたことを証明する。しかし、抑圧された女性たちを一括りに“abnormal”と記述してしまう Fannon の筆致それ自体にも、白人女性一般に対するステレオタイプの面があるということは注意しておかねばならない。つまり、黒人男性を“phallic beast”とみなす言説は、白人の間にのみ浸透するのではなく、黒人男性自身に作用し、「欲求不満の白人女性たちはみな自分たちを性的欲望の対象とみなしている」という逆方向のステレオタイプを抱かせるのである。「差異の構造は、黒人男性の内に再生産され、黒人男性の自我の構成に著しく影響する」(Feldman 94)。その意味で、レオナの「南部性」を繰り返し強調し、ときには「欲求不満の白いご婦人 (“a hard-up white lady”）」と嘲りさえするルーファス自身もまた (53)、(白人たちからのステレオタイプの視線を反射する形で) 人種的なステレオタイプに支配されているのだ。

たとえば Brandon Gordon や Jenny M. James は、レオナのルーファスに対する人種的なフェティシズムを強調するのだが (Gordon 81-82, James 49)、小説がレオナに声を与えない (レオナの内面が語られない) 以上、彼女が本当にルーファスの「黒さ」に対しフェティシズムを抱き、彼を単に性的欲望の対象としてのみ扱っていたと断定することは難しいだろう⁵。むしろルーファス自身が、「白人は自身を性的欲望の対象としてしか見ない」という観念に取り憑かれており、それ以外に自身を認識する方法を持たないということが重要である。第一章が主にルーファスの視点から語られていくのは、ポールドウィンが、白人の黒人男性に対するステレオタイプのものの見方そのものよりも、そうしたステレオタイプを他ならぬ黒人自身が内面化してしまったときに起こる悲劇、すなわち、異人種間における性愛の成就 (性的欲望と愛の一致) の根源的な不可能性を強調したかったがためだと考えられる。また、レオナのキャラクターが「南部出身の抑圧された人妻」というステレオタイプをなぞるように設定されているのも、テキスト自体がステレオタイプを肯定しているのではなく、そうした属性を持つ相手をステレオタイプ化してしまうルーファスの意識自体を前景化するためであると考えべきだろう⁶。

ここで前節でも触れた、ルーファスとレオナのはじめての性交の場面を再び検討してみよう。ルーファスはレオナに対する性的欲望の高まりを感じ、これはもっぱら彼女の分断された身体と、人種差別の特に激しい (軍隊でルーファス自身が暴力を体験した) 南部出身の白人であるという彼女の属性に向けられる。Lorelei Cederstrom は、ルーファスにとって「レオナは女ではなく、白人社会の罪を贖うべき南部人」であると述べているが (179)、これはややミスリーディングな記述で、「白人社会を贖うべき南部

人」であるからこそ、レオナはルーファスにとってサディスティックな性的欲望をそそのかる「女」なのである。

しかし彼女の身の上（人格）について知りはじめると、ルーファスはレオナの人格にむかう自身の意識が性的欲望とコンフリクトを起こすのを感じると同時に、それが触発する「愛情（affection）」が性的欲望に沿うように自身を身体的な性行為へと導くことを感じてもある。しかし問題は、この性交を通じて、ルーファスは自身の「愛情（affection）」と性的欲望を「愛」の名の下に統合することに失敗し、最後までそれらの分裂を抱えたままであるということだ。

行為のクライマックスに向かうにつれ、ルーファスの性的欲望ははっきりと人種的差異に基づいた言葉で言語化されていく。彼は「白い神にもリンチの群衆にも止められない」欲望に突き動かされ、「乳のように白い売女」の「股に己の武器を突き立て」る。射精の瞬間においてさえ、彼の脳裏によぎるのは「100 人もの黒白の混血の赤子を生み出すのに十分な毒が自身から放たれる」（22）という感覚である。このとき彼の性的欲望は、「白人女性を強姦する獣のような黒人男性」というステレオタイプにほとんど自らを同一化することによって掻き立てられているが（Harris 63）、このときルーファスからは“affection”や“tenderness”が消え去ってしまう。

たとえば Barry Gross は「愛の瞬間においてのみ、ルーファスは白黒の二項対立から一時的に逃れられる」と述べているが（114）、むしろ重要なのは、実際の性交渉は決して愛の瞬間になり得ないということだ。セックスはルーファスに人種への意識を忘れさせることがないばかりか、性的欲望の高まりによって、フェティッシュな人種的差異への意識はいよいよ増幅し、性愛における彼の「愛」の達成を阻害してしまう。セックスという「他者との最も親密な瞬間は、実際には差異を生み出し強化する内省を伴ってしまう」のである（Tsuji 102）。

ルーファスがレオナを徹底して「白人の売女」、すなわち性的欲望の対象としてのみ認識するのであれば、彼は苦しまずに済んだだろう。しかしことが終わった直後、レオナが身の上話を再開するにつれ、彼は再び「愛」の方向へと意識を向ける。「彼は彼女の話の聞きかたが違った。そしてこれ以上彼女について知りたくないとも思った」（22）。Jacqueline E. Orsagh が述べるように、「ルーファスは、彼女がセクシュアルな肉塊に過ぎないとみなすことと、彼女を一人の人間として考えることの間で揺れる」（60）。レオナもまた自身に愛（人格の承認）を求めているという事実が、ルーファスを性的欲望と愛の間で引き裂くのである。

さて、性体験が性的欲望の次元にとどまるか、そこに愛が見出されるかという問題は、最終的に認知の問題、さらには解釈の問題である。ゆえに、ルーファスが「黒人男性である自分は白人女性にとって性的欲望の対象でしかない」という自意識に縛られている以上、作中には描かれぬレオナとの度重なる性交が実際にはどのようなものであっても（レオナが彼をどのように扱ったとしても）、ルーファスは彼女と肌を重ねるほどに彼女の、そして己の（人種的差異に基づく）性的欲望だけを発見してしまうこ

とになる。「愛の行為においてルーファスが感じていたものは愛ではな」く (53)、ついにルーファスは自分自身が「肉と、骨と、筋肉と、体液と、体孔と、毛と、肌」でしかない、すなわちそれらを統合する「人格」が愛の名の下に見出されることはないと結論づけている (54)。アイダが、ルーファスとレオナの間を「人は、愛の名において相手をバラバラにし」、「死んだ後、あいつには人格 (character) がなかったなんていう」と分析するとき (265)、彼女は兄の孤独を正しく把握している。

ここまでの議論をまとめるなら、ルーファスの死は、性愛をめぐる二つの言説によって引き起こされたといえるだろう。一つは、性愛の成就、すなわち性的欲望と愛の一致が、人種という属性を超越するという幻想。そしてもう一つは、黒人男性を“phallic beast”とみなし、彼らの性愛を性的欲望のうちに閉じ込めるステレオタイプである。これらはどちらも白人によって形作られたものでありながら、黒人たちの自意識に作用し、「愛」を求める彼らを翻弄する。アイダの言葉を借りるなら、「白人たちは、黒人を同じ曲で踊らせようとする」のである (351)。

3、性愛の制度性

「愛による人種的差異の克服」というテーマは、ルーファスとレオナの間を介した挫折の後、アイダとヴィヴァルドという異人種カップルに引き継がれることとなる。作品中盤における二度目のセックスにおいて、ヴィヴァルドは一時的に性愛の理想を達成するかに思われる。しかし一貫してヴィヴァルドの視点から語られるこのセックスの成功は、その人種的な自意識によって“affection”と性的欲望の統合が（つまり愛の成就が）一時的にさえ許されなかったルーファスの悲劇を際立たせるし、作品が進み、アイダとヴィヴァルドの間に互いの関係認識の齟齬があったことが明らかになるにつれ、異人種間の性愛の成立は再びの挫折を見ることになる。別のいい方をすれば、ヴィヴァルドは自身とアイダの性愛関係の破綻を通じ、ルーファスの苦悩と、それを理解しなかった自分自身に向き合うことになるわけだ。

作品終盤、ヴィヴァルドはアイダにエリスとの不貞を告白される。このとき問題になるのは、やはり性的欲望と愛の一致の困難である。ルーファスの死によって、アイダは異人種間の性愛において実存を賭けること（愛を得ようとする）の不可能を悟る。

I used to see the way white men watched me, like dogs. And I thought about what I could do to them. How I hated them, the way they looked, and the things they'd say, all dressed up in their damn white skin, and their clothes just so, and their little weak, white pricks jumping in their drawers. You could do any damn thing with them if you just led them along, because they wanted to do something dirty and they knew that you knew how. All black people knew that. (418-19)

「彼ら（白人男性たち）は、なにか汚らわしいことをやろうとするんだけど、私たち（黒人女性）ならそのやり方を知ってるって思ってるのよ」というセリフには、人種的なステレオタイプに基づき、自身を性的欲望の対象としてしか認識しない白人男性の視線に対するアイダの（自）意識が表れており、それはちょうどルーファスの苦悩に対応している。Orsagh の言葉を借りれば「彼女は自身がいまもこれからも娼婦であるという考えに取り憑かれている」のだ（63）⁷。

ルーファスの喪失に対するアイダの訴えは非常に抽象的である。しかしルーファスの死の原因が性愛の失敗、より具体的には、白人たちに性的欲望の対象としてしか扱われていないという自意識にあったという前提に立てば、彼女の言葉を具体的な文脈において理解することができる。アイダはヴィヴァルドに対し「私は愛というでたらめ（That love jive）に騙された」と語り（410）、「自分はルーファスを愛していたが、あんたはルーファスについてなにもわかつちやいない」とヴィヴァルドを責める。

“How could you—how can you?—dreaming the way you dream? You people think you’re free. That means you think you’ve got something other people want—or need. Shit.” She grinned wryly and looked at him, “And you do, in a way. But it isn’t what you think it is. And you’re going to find out, too, just as soon as some of those other people start getting what you’ve got now.” She shook her head. “I feel sorry for them. I feel sorry for you. I even feel kind of sorry for myself, because God knows I’ve often wished you’d left me where I was——”

“Down there in the jungle?” he taunted.

“Yes. Down there in the jungle, black and funky—and myself.” (413-14)

この会話は、「愛というでたらめ」へのアイダの憤り、すなわち具体的な文脈においては、ヴィヴァルドとアイダの間に存在している（とヴィヴァルドが信じている）愛への不信にはじまり、（ヴィヴァルドを含む）白人とルーファスの間に存在し得る（と白人たちが信じている）一般的な愛への不信へと展開している。ここでアイダのいう“you people”とはもちろん白人のことで、「彼らを与えられると信じている、他の人が必要とするもの」とは、ルーファスがレオナに（あるいはヴィヴァルドに）求め得られなかったものと同じであるから、「愛」以外のものではあり得ない。それを与える能力があると思うこと自体が白人の幻想であるというのは、たとえばレオナが、自身がルーファスに向けるものを「愛」とであると確信しながら、ルーファスがそれを性的欲望としか解釈できないこと、あるいは、ヴィヴァルドがアイダに対して向ける「愛」が、アイダには心から信じられないことに対応している。つまり、性愛の可能性をはじめから抑圧されている黒人の苦境に気づくことなく、自身の「愛」の純粋性を疑ってもみない白

人たちの自意識の低さを、アイダは断罪しているのである。さらにアイダは、「自分が元いた場所、blackでfunkyなジャングルの奥に放って置かれたままだったらよかったのに」と嘆く。これは彼女が黒人の共同体を出たことをまずは指しているが、「愛というでたらめに騙された」という発言を念頭に置けば、これはアイダが、ルーファスの死によって諦めていた、白人男性との性愛の可能性を再び求めてしまったことを指すと考えられる。

ルーファスの死後、異人種間の性愛に絶望し、さりとて黒人共同体の中で生きていくことの行き詰まりを感じてもいたアイダは、己の（性的な）身体を武器に白人が支配するショービジネスの世界でのし上がることを決意する。「自分はルーファスのような目には決して合わない（“But I wasn’t going to let what happened to Rufus, and what was happening all around me, happen to me”）」(417)とアイダがいうとき、「ルーファスに起こったこと」とは「性愛の成就を求め、裏切られたこと」である。ルーファスの悲劇が、異人種間の性愛における愛と性的欲望の不可能な融合を求めたのにはじまったことを正しく認識するアイダは、自らの身体を徹底して欲望の対象として自覚し、愛から、すなわち人格そのものから切り離すことによってそれを己の武器とする。「あいつら（白人男性）が、私にくれたものより少しでもマシなものに値するなんて、私には思えない（“And it didn’t seem to me that they deserved any better than what they’d given me”）」(417)というセリフは、白人男性がアイダに与えたものが結局のところ性的欲望にすぎず、ゆえにアイダは愛（それよりマシなもの）の通わない身体（あるいはアイダ自身の性的欲望）を、金銭と引き換えに彼らに与えたことを示唆するだろう。

And it was worse now, since I’d been with you [Vivaldo], than it had ever been before. Before, I used to watch them wriggle and listen to them grunt, and, God, they were so solemn about it, sweating yellow pigs, and so vain, like that sad little piece of meat was making miracles happen, and I guess it was, for them—and I wasn’t touched at all, I just wished I could make them come down lower. (423)

かつて（“Before”）、すなわちヴィヴァルドが愛の対象として浮上する以前、アイダにとって白人たちに身体を与えることは、「お粗末な肉の塊で奇跡（愛）を起こすことができる」と信じている（“that sad little piece of meat was making miracles happen”）彼らを「貶める（“I just wished I could make them come down lower”）」手段であった。Amy Reddingerの指摘するように、それは「白人男性と寝ることによって兄の復讐を果たす」ことに他ならないが（123）、現実には性的な搾取であるものが「復讐」になるのは、性的欲望以上の「奇跡」の可能性を信じる白人男性たちに対し、あくまでも性的欲望の側にとどまり続けるアイダの自意識においてである

ことは強調しておかなければならない。つまり、アイダはセックスにおける「愛」の可能性を自意識の上で徹底的に抑圧し、白人男性たちの性的欲望を自らコントロールすることで、人種を超えて普遍的に成立すると信じられている性愛の観念そのもの、そしてそれを生み出した白人たちを軽蔑しているのである。

結局、彼女が抑圧した性愛の可能性は、ヴィヴァルドという人格を伴って回帰することになる。ただし、アイダが当初ヴィヴァルドとの間に求めた関係は、白人たちが信じる性愛の概念からは明確に区別されていることには留意すべきだろう。アイダは「私はあんた（ヴィヴァルド）と寝たかった。恋愛したいというのじゃなくて、ただ好きな誰かと寝たかっただけなの（“I think I wanted to go to bed with you, not to have an affair with you, but just to go to bed with somebody that I liked”）と述べる（419-20）。このとき、「寝ること」から「恋愛（have an affair）」が区別され、「愛している（love）」ではなく「好き（like）」という言葉が用いられていることの意味は重要である。ここまで述べてきたように、「愛」は個人のアイデンティティの形成（実存）に関わる。ここでアイダがその言葉を避けるのは、彼女が性愛に実存を賭けることを未だ拒否しているからで、このとき彼女がヴィヴァルドに対して抱く感情は、対象の人格（総体）に対する指向性を伴った性的欲望、すなわちルーファスがレオナに対して当初抱いていたような「愛情（affection）」の段階にとどまっている。

ここであらためて明らかになるのは、“affection”と“love”の差異なのだが、重要なのは、アイダのヴィヴァルドに対する感情が“affection”の段階にとどまることができない（ゆえにアイダは苦しむ）ということであり、また、彼女の“affection”から“love”への変化が内発的なものではなく、ヴィヴァルドとエリスが自身との関係において並列する、という認識をエリスから吹き込まれることによって起こっているという点である。アイダ自身が認識しているように、エリスは「アイダがヴィヴァルドを本当に好きだということを見抜き、「ならば自分も（アイダに好かれることができるはずだ）」という動機から彼女との関係をはじめようとする（420）。つまり、エリスは（少なくとも彼の自覚において）アイダを性的欲望の対象としてのみ認識していたのではなく、彼女の「愛情」を求めてもいる。アイダもまた「彼は私を騙そうとしてるわけじゃなかったと思う、奥さんと子供の話をしてるときでさえ。本当に孤独だったんだと思うわ」と述べており（420）、いわば自身に愛情を求めるエリスにほだされているわけだが、ここでエリスがヴィヴァルドと同様、“affection”を前提にした関係に配置されることになる。

He really is smart. He was *glad* I was with you, he told me so; he was glad I had another boy friend because it made it easier for him. It meant I wouldn't make any scenes. I wouldn't think I'd fallen in love with him. It gave him another kind of power over me in a way because he knew that I was afraid of your finding out and the more afraid I got, the harder it was to refuse him. (421)

ここでエリスが述べていることの要点は「アイダはヴィヴァルドというボーイフレンドがいるのだから、自分との関係に愛は求めない」、「ヴィヴァルドにバラされたくなければ、自分との関係を継続しろ」ということで、この理屈には“love”と“affection”の都合のよい読み替えがある。まずエリスとアイダとの関係には、すでに述べたように性的欲望だけではなく“affection”が介在している。ただし、そもそもアイダにとって“affection”の関係とは、「好きな人と寝ること」に過ぎず、いわば互いに拘束を持たない関係だったはずである。しかしここでエリスが想定するアイダとヴィヴァルドの関係は、他の性的関係との共存を許さない排他的、相互拘束的なものであり、エリスはそれを“love”と呼んでいる。

つまりここで明らかとなる“affection”と“love”の差異とは、“affection”が人格への指向から身体的な接触への自然な移行であるのに対し、“love”は単一性、あるいは相互拘束を前提に互いのアイデンティティを保証する（白人の生み出した）制度に過ぎない、ということだ。加えて重要なのは、アイダがエリスからの脅迫に屈してしまっている以上、アイダが結果としてエリスによる“affection”の読み替えを受け入れてしまっていることである。つまり、アイダにとってヴィヴァルドとの関係はすでに取替え可能なものではなく、かつ他の男性との性関係を許容しない、単一性を前提する“love”（モノアモリー）だと意識されてしまっているのだ。これによってアイダはヴィヴァルドとの性関係を「愛」のもとに統合する性愛への欲望を内面化することになるが、それは同時に彼女の苦悩のはじまりでもある。

But now it was different, sometimes when Ellis put his hands on me, it was all I could do not to scream, not to vomit. It had got to me, it had got to me, and I felt that I was being pumped full of—I don't know what, not poison exactly, but dirt, waste, filth, and I'd never be able to get it out of me, never be able to get that stink out of me. And sometimes, sometimes, sometimes—. . . . Oh, Lord Jesus. I've done terrible things. Oh, Lord. Sometimes. And then I'd come home to you. He always had that funny little smile when I finally left him, that smile he has, I've seen it many times now, when he's outsmarted somebody who doesn't know it yet. . . . And then I'd come home and look at you. But I'd bring him with me. It was as though I was dirty, and you had to wash me, each time. And I knew you never could, no matter how hard we tried, and I didn't hate him but I hated you. And I hated me. (423-24)

ヴィヴァルドを愛し、愛されることを望んでしまったいま、彼女は軽蔑してきた性的身体においてもまた愛を求めることになり、彼以外の男とのセックスは無意味なだけにと

どまらず、彼女に汚穢の感覚をもたらすことになる。さらに、ヴィヴァルドとの外面上の性愛関係の単一性を保つために、その単一性の実質を損なわなければならないことは、彼女をある種ダブルバインド的な状況に置き、そのアイデンティティを分裂の危機に追いやる。

まとめるなら、アイダは異人種間における性愛の成就に対して強烈な疑念を抱いているが、“affection”を捨てることはできず、それはエリスとの関係を通じて“love”という制度に取り込まれてしまう。このときアイダを苦しめるのは、人種という壁によって阻まれる性的欲望と愛の一致の可能性だけではなく、愛を得るために必要とされる性関係の単一性、すなわち一夫一婦制を規範とするような性愛倫理でもある。ヴィヴァルドとエリスの間に引き裂かれたアイダの性愛関係は、その複数性においても理想から離れていく。

4、脱性愛化と複数化

ここまで我々は、*Another Country*における性愛の理想形が、ルーファスとレオナ、ヴィヴァルドとアイダという二つの異人種カップルにおいて挫折していく様子を観察してきたが、前者のカップルでは、性的欲望と愛の一致が人種的なフェティシズムによって阻害され、また、後者のカップルはその問題を引き継ぎつつ、単一的・排他的な性倫理の制度性に苦しめられている。これらの問題は、アイダとの関係に行き詰まったヴィヴァルドにエリックとの性交渉がなんらかの救いを与え、さらにそれによってアイダとの関係にも変化が生じている、という作品終盤の展開を考えるにあたりとりわけ重要であるように思われる。つまりここでの問題は、ヴィヴァルドとアイダ、ヴィヴァルドとエリックそれぞれの関係が共存しているということであって、その共存のあり方こそが問われなければならない。

エリックとヴィヴァルドとのセックスは作中で最も成功した性愛の形をまずは示しているように見える。性的欲望が相手への優しさで混じり合い、そこには敬意さえも含まれる。行為は繰り返し呼ばれる名前と感謝に終わり、残るのは穏やかな安堵、与えられる愛が彼を意味付け、世界のすべてから守るという絶対的な安心である（387）。ここにはまさに互いの愛のみによって実存が担保される性愛の理想像が体現されている。

注意せねばならないのは、ヴィヴァルドは、いま彼が面している問題、すなわちアイダとの愛の行き詰まりが、エリックとの性愛によって解決されないという事態を、正しく把握しているということである。エリックとの性愛関係は、すでに触れたように、ヴィヴァルドがルーファスとの性愛による救いの可能性を口にした直後、亡霊となったルーファスに追い詰められる悪夢から地続きに描かれるうえ、行為の最中もヴィヴァルドが繰り返しルーファスとアイダの名を口にすることから、ルーファス／アイダとの異人種性愛関係の想像的な解決になっていると解釈されることが多く⁸、近年ではそれ自体のイデオロギー的な問題点が指摘されてきた。しかし、行為を終えたヴィヴァルドが

エリックに「これは俺の戦いではないのだ」といい (397)、あらためてアイダと対峙することを決意することからもわかるように、テキストはヴィヴァルド・エリック間の同性愛関係を絶対化し、アイダとの異人種・異性愛関係の困難を隠蔽することを禁じている。

エリックと別れたヴィヴァルドはついにアイダと対峙し、ルーファスとアイダの抱える人種的な自意識と、アイダの「不貞」の問題に向き合うことになる。ヴィヴァルド自身の言葉を借りれば、アイダと向き合うことはすなわち「自分の戦い」を戦い抜くことであり、それは「一生、エリックに愛され続ける」ために必要なことでもある (397)。つまり、アイダと向き合う決意を固めるということ自体が、エリックとの間に成就した性愛の関係に後押しされていると考えられる。さらにアイダの告白を聴き終えたヴィヴァルドが、彼女が席を外している間に電話でエリックと会話をかわすことにも注目したい。この会話が、アイダの告白と二人の（ひとまずの）和解の間にわざわざ挿入されていることは、ヴィヴァルドの最終的な決断に対しエリックとの関係の帰結が決定的に重要であることを示しているように思われる。

電話を切った後、再びアイダに対面するヴィヴァルドがまず思うのは「いまやアイダとのセックスはどのようなものでありうるか (“He wondered what her lips would taste like now, what her body would be like for him now”）」ということで、さらに彼のアイダへの感情は「怒りと、憐れみと、愛と、軽蔑と、欲情」がないまぜになったものとして表現される (430)。もちろんこうした内省をもたらずのは、ヴィヴァルド自身の内的独白として表現されているように、第一には、アイダもまたあばずれ (bitch) に過ぎず、自分は騙されていたという思いである。しかし、これがエリックとの理想化された性愛体験の直後に配置され、さらに電話によってそれが想起させられる以上、少なくともテキスト上の効果として、我々はヴィヴァルドが想像するアイダとのセックスに、エリックのとのそれを対比することになるだろう。このときヴィヴァルドは、アイダへの愛を告げようとし、また彼女が自分に触れられることを待っていると感ずるのだが、そのどちらをもためらい、動き出すことができない。このためらいは、ルーファスの自殺が愛と性的欲望の一致の不可能にあったことを教えられた者の反応として当然だといえるが、同時に、アイダとの性愛の成就是、エリックとの完璧な性体験の後では一層絶望的であるように思えたことに起因しているとも考えられるだろう。

この膠着状態を破るため、ついにヴィヴァルドはアイダへ愛を告げ (“You seem to forget that I love you”) キスをするのだが、そのキスはされると同時に凍りついていく (“kisses, which seemed to freeze as they fell”)。その後彼女はヴィヴァルドに抱きつき、その胸に顔を埋めるのだが、「そこにエロティックなものは一切なく、二人は疲れた子供のように (“There was nothing erotic in it: they were like two weary children”）」である (431)。ここでなによりも重要なのは、性愛における愛と性的欲望の葛藤が、ヴィヴァルドとアイダの関係においては、その一致によってではなく、性的欲望の放棄によって解消されている、ということである。

たとえば James はこの場面に現れる “tremble”、“clung”、“stroke” といった動詞に「エロティックな残滓 (“erotic remainder”）」があると主張し、「*Another Country* においてヘテロセクシュアルな恋愛プロットが、人種の差異の再帰という政治的な重荷によって破綻してしまうとしても、依然としてポールドウィンはセックスを、新たな親密さの絆を獲得するために有効な手段として考えている」と論じている (54-55)。性愛が物語の結末においても力を失っていないという結論には同意できるが、ヴィヴァルドとアイダの関係におけるエロティシズムがすでに「残滓」に過ぎず、それが「凍りつき」ついには失われてしまうのだとすれば、やはり結末においてヴィヴァルドに性愛の可能性を担保するのは、アイダとの関係ではなく、それに対比されるエリックとの関係であるように思われる。

ここで主張したいのは、テキスト上、エリックとの関係がアイダとの関係に優先している、ということではない。重要なのは、ヴィヴァルドとアイダの脱性愛的な関係とヴィヴァルドとエリックの性愛的な関係が、テキスト上で強烈に対比されながらもおかつ共存しているということである。誤解を避けるために付け加えておけば、二組の関係の性における対比は、たとえば現実的なレベルでこの後のヴィヴァルドとアイダの関係におけるセックスレスや、ヴィヴァルドとエリックの性交渉の継続を暗示するわけではない（し、あえていうならむしろ逆の事態が発生する可能性の方が高いだろう）。そうではなく、あくまで象徴的なレベルにおいて、テキストはヴィヴァルドとアイダの関係に性愛からの脱却を印象づけ、ヴィヴァルドとエリックのそれにおいては性愛を前景化しており、それらが相互補完的な関係にあるということだ。つまり、ヴィヴァルドはエリックとの性愛が想起されればこそ、アイダとの関係を脱性愛化することができるし、またそうした形であらためてアイダに向き合えばこそ、エリックとの性愛関係に確信を持つことができるのである。ヴィヴァルドが己のアイデンティティを保つには「自分の戦いを戦う」、すなわちアイダを愛することと、エリックに愛されることの両方が必要なのだ。

このときヴィヴァルドの、そしておそらくエリックの性関係が複数化していることは、アイダがヴィヴァルド、エリスそれぞれとの性関係において、単一性を前提とする性倫理に苦しめられていたことに比して重要である。厳密に言えば、アイダがエリスとの関係に苦しむのは、エリスが単一性に基づく性倫理を前提としながら（アイダはヴィヴァルドを愛しているのだから、自分を愛することもないし、告発もしない）アイダに対してその倫理を犯させる（自分との関係を継続させる）からだし、なによりもアイダがエリスに仕事面、経済面で援助を受けている以上、二人の関係が対等ではない（エリスはアイダを性的に搾取している）。対して、ヴィヴァルドとエリックは対等な立場であり、互いの関係とは別に「それぞれの戦い」、つまりアイダ及びイーヴとの関係があることを認めているため、相互に関係の複数性を承認している。ヴィヴァルドはいう。「もしそれを調整しようとしたり、長引かせようとしたり、コントロールしようとしたりすれば、もし俺たちがなんらかの奇跡によってたまたま手に入れたものに満足せず、それ以

上のものを望んだりすれば、俺はきっと寄生虫みたいになってしまって、俺たち二人ともダメになっちゃうよ」(396)。ここでヴィヴァルドは、彼らの愛を壊すものが相互拘束であることを明確に指摘している。つまり、結末におけるヴィヴァルドにとっての救いは、単一的に基づく性倫理から限定的にであれ解放されることで成立しているのだ。

もちろん、この結末はヴィヴァルドとエリック双方に、あるいは小説のイデオロギー的な構成に、様々な犠牲を強いることになる。たとえば、性愛の単一性からの解放が限定的だと示唆しておいたように、ヴィヴァルドとエリックはそれぞれアイダとイーヴに対して互いの関係を告白できない。アイダの告白直後の二人の電話の内容が、ヴィヴァルドとアイダを「友達」としてイーヴに紹介したいという申し出であったことからわかるように、ヴィヴァルドとエリックは互いの関係を共犯的に秘密にする。つまり、現実二人の性関係が今後継続する可能性は低く、一方二人はそれぞれアイダ、イーヴに対し罪悪感と秘密を抱えることになる。このことは、たとえばエリックと別れた直後のヴィヴァルドが、アイダの情緒不安定さから、自分とエリックとの関係が疑われているのではないかと勘ぐり、さらにそれを打ち消そうとしてパニックに陥っていることにも現れている(412)。性愛の複数化と引き換えに、ヴィヴァルドとエリックは性関係の安定性を損なっているのだ。

さらに、ヴィヴァルドがアイダとの関係において性愛の成就を諦める以上、性愛が人種の差異を克服する可能性は、疑問に付されたまま残されている。また、仮に性関係の複数性が、ヴィヴァルドとアイダの関係を脱性愛化することを可能にしているとしても、それはあくまでヴィヴァルドの側に限るのであり、依然エリスに搾取されるアイダには、たとえばヴィヴァルドにとっての同性愛のような、新たな性愛の可能性は示唆されていない。この意味で、この作品の結末がイデオロギー的な葛藤を葛藤のまま放置して成立していることは否定できないように思われる。

しかし、このように様々な問題点が残されていることを理解した上でなお指摘しておかねばならないのは、そもそも単一的な性愛に個人のアイデンティティのすべてを賭けようとするもののプレッシャーが、ルーファスを、あるいはアイダを苦しめていたのではないかということ、だとすれば、リスクを背負いながらも単一性から解放されたところで性愛の可能性を探ろうとするヴィヴァルドとエリックの試みにも十分意味があるように思われる。ヴィヴァルドは、自身とエリックの性愛関係を「自分たちを脅かすものからの逃避 (“*hiding from things which frighten us*")」だという(396)。しかし、その「隠れ家」の存在を思えばこそ、彼らは再びそれぞれの「戦い」に戻ることができる。性愛は逃げ場にしかなく、また逃げ場であってよい。人は個対個の間の性愛関係だけが互いを意味付けるという呪いにも似た幻想から解放されなければならず、またその立場にたってはじめて、性愛という関係が本来持ち得る可能性を再評価することができる。性愛の限界を見つめることで、翻ってその可能性を問うこと、それが *Another Country* という小説におけるポールドウインの戦略ではないだろうか。

注

¹ 翌年 “Down at the Cross” と改題され *The Fire Next Time* に収録。

² Terry Rowden は、ルーファスと黒人共同体との関係が十分に描かれていないことを指摘しつつ、その描写の不十分さは「ナラティヴの都合という面から見ることでのみ納得できる」と述べている (44)。“We are repeatedly told of how well loved and respected Rufus is by his fellow jazzmen, but he is never shown actually relating to them as one black man, or more specifically as one black artist. . . . Only by going completely outside of the framework that Baldwin sets up and reading the novel as the depiction of the going-on among a self-consciously experimental group of sexual radicals can this particular collection of people be rendered believable” (43-44)。本稿の立場は基本的に Rowden と同じであるが、むしろ強調すべきは、黒人同士の関係（とりわけ性愛関係）が描かれないのは、異人種間の性愛の可能性と限界という問題にボールドウィンがフォーカスした結果である、ということだろう。

³ “affection” という単語に “Favourable or kindly disposition towards a person or thing; fondness, tenderness; goodwill, warmth of attachment” (*OED*) と定義されるような指向性を持った感情の意味が存在しており、また後に “tenderness” という言葉でいいかえられていることから、この “affection” という概念を、いわゆる「情動理論」において定義されるような「人間としての感覚へと分化する以前の、主観や意識によって管理・管轄されない、物や動物、環境への生成変化」(竹内 6) と同一視することは留保しなければならないだろう。

⁴ 性行為のクライマックスにおいて相手の名前を呼ぶことに関して、William A. Cohen は以下のように述べている。“This sexual connection generates an orgasmic concatenation of identities, whereby Vivaldo conceives of himself as simultaneously gay and straight, male and female, white and black—to the extent that his own voice, *speaking the names of his lovers*, is alienated from him. The experience unsettles his identity in terms of gender and sexuality; that it constitutes for him ‘another mystery, at once blacker and more pure’ (324) suggests it breaks down racial categories as well” (212、強調引用者)。

⁵ Lorelei Cederstrom は “Leona is not a very fully developed character; her thin voice suggests little more than Ophelia’s mad songs, and like Ophelia, Leona is a victim rather than actor in her own tragedy” と述べている (179)。このように、レオナの内面を描かないこと、すなわち、レオナが本当に人種的なフェティシズムのみにおいてルーファスを欲望していたかどうかを分からなくすることによって、作者のボールドウィン自身はレオナのステレオタイプ化を避けているといえるかもしれない。

⁶ あるいは Jacqueline E. Orsagh の述べるように「我々読者はレオナの像の半分をルーファスの視点から見ることになり、自然そこに描かれる彼女のキャラクターは限定的なものになる」と考えてもよいだろう (62)。

⁷ また James は、ヴィヴァルドとはじめてのセックスを終えた後のアイダが狸寝入りをしなから、自身に向けられるヴィヴァルドの欲望の視線を意識しており、その後自らを娼婦になぞらえた歌を歌うことに触れ、アイダがヴィヴァルドと同様の人種的、性的な自意識を内面化し

ていると指摘している (50)。

⁸ たとえば、Cohen 211、永尾 221-22 など。

Works Cited

- Baldwin, James. *Another Country*. Vintage, 1993.
- . "Down at the Cross." *Collected Essays*, edited by Toni Morrison, Library of America, 1998, pp. 296-347.
- Brim, Matt. *James Baldwin and the Queer Imagination*. U of Michigan P, 2014.
- Cederstrom, Lorelei. "Love, Race and Sex in the Novel of James Baldwin." *Mosaic*, vol. 17, no. 2, Spring 1984, pp. 175-88.
- Cohen, William A. "Liberalism, Libido, Liberation: Baldwin's *Another Country*." *Queer Sixties*, edited by Patricia Juliana Smith, Routledge, 1999, pp. 201-22.
- Fannon, Frantz. *Black Skin, White Mask*. Translated by Richard Philcox, Grove Press, 1967.
- Feldman, Susan. "Another Look at *Another Country*: Reconciling Baldwin's Racial and Sexual Politics." *Re-Viewing James Baldwin*, edited by D. Quentin Miller, Temple UP, 2000, pp. 88-104.
- Freeburg, Christopher. "Baldwin and the Occasion of Love." *The Cambridge Companion to James Baldwin*, edited by Michel Elam, Cambridge UP, 2015, pp. 180-93.
- Gordon, Brandon. "Physical Sympathy: Hip and Sentimentalism in James Baldwin's *Another Country*." *MFS*, vol. 57, no. 1, Spring 2011, pp. 75-95.
- Gross, Barry. "The 'Uninhabitable Darkness' of Baldwin's *Another Country*: Image and Theme." *Negro American Literature Forum*, vol. 6, no. 4, Winter 1972, pp. 113-21.
- Harris, Trudier. *Exorcising Blackness: Historical and Literary Lynching and Burning Rituals*. Indiana UP, 1984.
- James, Jenny M. "Making Love, Making Friends: Affiliation and Repair in James Baldwin's *Another Country*." *Studies in American Fiction*, vol. 39, no. 1, Spring 2012, pp. 43-60, 123.
- Lash, John S. "Baldwin Beside Himself: A Study in Modern Phallicism." *James Baldwin: A Critical Evaluation*, edited by Therman B. O'Daniel, Howard UP, 1977, pp. 47-55.
- Ohi, Kevin. "'I'm not the boy you want': Sexuality, 'Race,' and Thwarted Revelation in Baldwin's *Another Country*." *African American Review*, vol. 32, no. 2, Summer 1999, pp. 261-81.
- Orsagh, Jacqueline E. "Baldwin's Female Characters: A Step Forward?" *James Baldwin: A Critical Evaluation*, edited by Therman B. O'Daniel, Howard UP, 1977, pp. 56-68.

- Reddinger, Amy. "Just Enough for the City": Limitations of Apace in Baldwin's *Another Country*." *African American Review*, vol. 43, no. 1, Spring 2009, pp. 117-30.
- Roden, Terry. "A Play of Abstraction: Race, Sexuality, and Community in James Baldwin's *Another Country*." *The Southern Review*, vol. 29, no. 1, Jan 1993, pp. 41-50.
- Standley, Fred L. "*Another Country*, Another Time." *Studies in the Novel*, vol. 4, no. 3, Fall 1972, pp. 504-12.
- Tsuji, Hideo. "Another Style of Love: Self-Exploration by Detour in James Baldwin's *Another Country*." *The Journal of the American Literature Society of Japan*, vol. 2013, no. 12, 2014, pp. 91-108.
- 大澤真幸『恋愛の不可能性について』ちくま学芸文庫、2005年。
- 竹内勝徳「まえがき」『身体と情動——アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』竹内勝徳ほか編、彩流社、2016年、1-10頁。
- 永尾悟「人種認識の経由地としての南部——ジェイムズ・ボールドウインの『もう一つの国』」『ホワイトネスとアメリカ文学』安河内英光ほか編、開文社出版、2016年、203-230頁。